

Protistology Newsletter

April, 2016

日本原生生物学会会報 (No. 30)

URL: <http://protistology.jp/>

第 49 回大会 (岡山) のご案内 (第 1 報)
第 48 回大会 (東京) 報告
会長就任のご挨拶
学会活性化委員会からのお知らせ
日本分類学会連合 第 15 回総会 報告
国際会議派遣費助成 参加報告 (3 件)
若手の会 通信
原生生物学関連の学会等開催情報
事務局からのお知らせ
編集委員会からのお知らせ

第 49 回 日本原生生物学会大会 (岡山) のご案内 (第 1 報)

大会長 安藤 元紀 (岡山大学)

2016 年, 第 49 回 日本原生生物学会大会は, 下記の日程で岡山大学津島キャンパスにて開催されます. 10 月初旬の岡山は, 例年, 晴天に恵まれ平均気温も 20 °C 前後と原生生物採集にも最適な季節となります. 晴れの国・岡山 (秋の吉備路) に是非お越しください.

1. 会期 2016 年 10 月 8 日 (土) ~ 10 月 10 日 (月)

10 月 8 日 (土) : 評議員会, 若手の会 (予定)
9 日 (日) : 大会 第 1 日目
10 日 (月) : 大会 第 2 日目

※ 上記予定については今後追加・変更する場合があります. その場合は学会ホームページ, および, 学会大会ホームページ (現在準備中です) にて随時皆様にお知らせいたします.

2. 会場

岡山大学津島キャンパス
(岡山大学津島キャンパスアクセスホームページ :
http://www.okayama-u.ac.jp/tp/access/access_4.html)

編集委員会・評議員会 : 一般教育棟 A43
総会・発表会場 : 一般教育棟 A41
懇親会 : 岡山大学生協ピーチユニオン

3. 発表形式

液晶プロジェクターを用いた口頭発表, およびポスター発表.
※ 発表演題数により, 発表方法の変更をお願いする場合があります.

4. 参加申し込み

要旨提出締め切りおよび事前参加申し込み締め切りは, 2016 年 9 月 8 日 (木) (予定) です.
申し込みの詳細等は次号のニュースレターでお知らせいたします.

5. 大会参加費等

大会参加費等は, 当日受付にてお支払いください. 当日参加も受け付けますが, 準備の都合上, できる限り事前の申し込みをお願いいたします.

大会参加費 : 一般会員 3,000 円 学生会員 1,000 円
懇親会費 (予定) : 一般会員 4,000 円 学生会員 2,000 円
昼食 : 生協カフェテリア (マスカットユニオン) が利用可

6. 宿泊

岡山駅周辺に各種ホテルがありますので, 各自でご予約ください.

7. アクセス

岡山大学津島キャンパスへの公共交通機関～経路等
○ JR 山陽新幹線岡山駅より
・東口岡電バス 2 番乗り場 17・67 系統 「妙善寺行」 30 分
「岡大東門」下車 徒歩 1 分

- ・西口岡電バス 22 番乗り場 47 系統「岡山理科大学行」 15 分
「岡大西門」下車 徒歩 8 分
- ・西口からタクシー 10 分
「津島キャンパス東門」下車 徒歩 1 分
- JR 津山線法界院駅より
 - ・徒歩 10 分
- 岡山空港より
 - ・岡山空港 2 番乗り場から「岡山駅西口」行に乗車「岡山大学筋」で下車、徒歩約 7 分。
 - ・ノンストップ便は「岡山駅」で下車、岡山駅からの各種交通機関を利用

8. 大会事務局

〒700-8530 岡山市北区津島中3丁目1番1号
岡山大学大学院教育学研究科・自然教育学系・細胞生理学研究室
第49回日本原生生物学会 大会事務局 安藤 元紀
Tel & Fax : 086-251-7753
E-mail : andom@okayama-u.ac.jp

第48回 日本原生生物学会大会（東京）のご報告

大会長 八木田 健司（国立感染症研究所）

第48回日本原生生物学会大会は、2015年11月6日（金）から11月8日（日）までの3日間、国立感染症研究所（東京都新宿区）で開催されました。故今井 壯一 先生（前会長）が2003年に日本獣医畜産大学で第36回大会を開催されて以来、12年ぶりの東京での開催でした。今大会は学会初の試みである韓国原生生物学会（KSOP）との合同企画もあり、参加者は本学会員75名（一般47名、学生25名、名誉会員3名）、そしてKSOP会員からは19名（一般14名、学生5名）の参加があり、シンポジスト5名を合わせ100名に達するという盛況な大会となりました。大会懇親会には参加者のほとんどが出席され、日本語、韓国語、英語が飛び交い、交流の輪がいくつもできておりました。大会内容は、一般講演16題、ポスターセッション23題、そして2つのシンポジウムと、2日間でこなすにはかなり濃密なものとなりましたが、いずれも活発な議論が交わされ、本学会員のみならず、KSOPを交えた原生生物学研究者の交流が深まったのが何よりの成果と思っております。ポスターセッションは、設置した場所がやや狭かったかと反省しておりますが、各ポスターを前に繰り広げられた議論による熱気と、その音量のすごさに圧倒されました。今回、KSOP会員はシンポジウム以外ではポスターのみの発表で参加を頂きましたが、その内容はすばらしく、本学会にも大変有益なものであったと思っております。特に本学会若手の会員にとって、このような交流の場が自らの研究活動への刺激になってくれればと、多いに期待したところでもあります。またKSOPとの合同企画で開催した「日韓合同シンポジウム JSP-KSOP Joint Meeting 2015」では、両学会の紹介と最新の研究トピックの発表が行われ、これもお互いの学会を良く理解し交流を深める機会になったのではないかと思います。今回のKSOPとの交流は、学会開催のご挨拶の際に説明をさせて頂きましたが、まずはキックオフであり研究者の顔を覚えようということでした。今後の交流の形につきましては、日韓の事前折衝的な話が懇親会の中で進んでいたようですが、今後の交流はKSOPで引き受ける、ということまで合意？だったように記憶しております。いずれにしても、両学会で議論し、今後より良い形で関係が進むことを期待したいと思います。



大会長 八木田 健司 先生



大会会場 国立感染症研究所



一般講演



ポスター発表



日韓合同シンポジウム
(Prof. Mann Kyoon SHIN)



今井 先生メモリアル
シンポジウム
(伊藤 章 先生)

もうひとつのシンポジウムは、学会前に急逝された今井 先生のメモリアルシンポジウムとして開催されました。はじめに本学会を代表して沼田 治 会長より今井 先生への追悼の言葉がありました。今井 先生のこれまでの業績に加え、若き日の颯爽たるお写真など、研究者としての今井 先生が強く印象に残るお話でした。続いた 4 題の寄生原生生物に関する発表では、寄生虫関連の学会でも活躍をされてきた今井 先生の業績を振り返り、またシンポジストの先生方のお話の中で今井 先生とのご関係の深さを教えて頂くなど、今井 先生のお人柄も伺えた機会にもなりました。当日会場には、今井 先生とご深交のあった先生方、そして奥様もお見えになり、会員共々今井 先生を心より偲ぶ時間を過ごすことができました。シンポジストの先生方はじめ、参加者の皆様には改めて御礼申し上げます。

一方、例年大会初日に開催される若手の会によるシンポジウムは今大会でも趣向が凝らされ、テーマとなった「原生生物とベンチャービジネス」の内容には、原生生物の活躍の場の広さとその将来性に目を惹くものがあったように思います。ミドリムシの話には以前から興味があったのですが、ではミドリムシの次は何なのか!? 本学会の中から今後出てくるのを期待したいところです。また早川 会員から紹介のあった「原生動物園」は、まさにIT時代の学会活動のひとつの姿であると納得しました。毎回テーマ選定に苦心されると思いますが、若手のみなさん、ぜひ努力を続けて頂きたいと思います。若手の頑張りは、16 題の BPA 対象演題でも発揮され、その代表と言ってよろしいでしょう。今大会では山岡望海 会員（兵庫県立大）と松原 立真 会員（国立感染症研究所）の 2 名が BPA を受賞されました。

総会では、日本原生生物学会・学会賞に園部 誠司 会員（兵庫県立大）の受賞が報告され、その後に受賞記念講演が行われました。今大会では本学会の今後の活動に向けての新たな体制が決まりました。新学会長として沼田 治 会員（筑波大学）、そして規約を改正し新たに学会副会長を設け、その任には小林 富美恵 会員（杏林大学）が選出されました。日本原生生物学会は 正・副 2 名の会長による新体制で出発することになります。会長、副会長を中心に、さらなる本学会の躍進を期待して止みません。

最後に、例年の大会同様多くの方々のご協力により 2015 年東京大会は成功裏に終えることができました。参加頂いた本学会員ならびに KSOP 会員各位、運営サポートにご協力頂いた皆さまには改めて厚く御礼申し上げます。次期大会は岡山です。多数の参加で岡山大会を盛り上げましょう。



名誉会員記授与
高橋 三保子 名誉会員
(左: 沼田 会長)



名誉会員記授与
金田 良雅 名誉会員
(左: 沼田 会長)



学会賞受賞者
園部 誠司 会員
(左: 沼田 会長)



BPA 受賞者
山岡 望海 会員 (左) と松原 立真 会員 (右)
(中: 沼田 会長)



大会懇親会



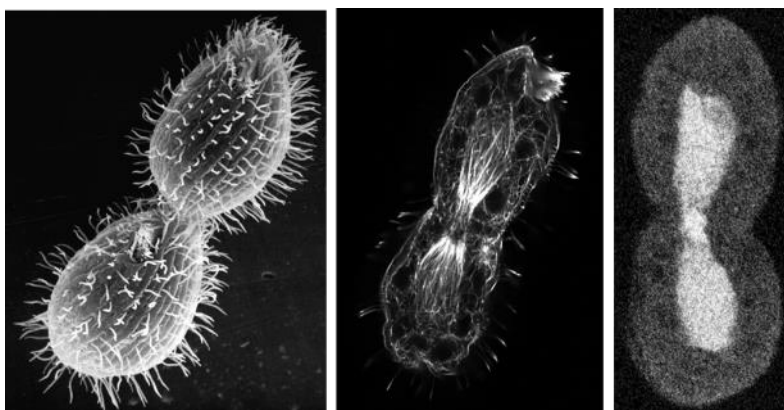
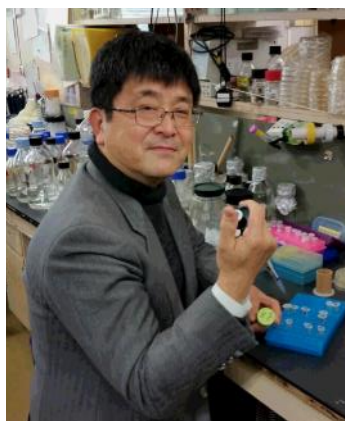
大会参加者一同 (JSP・KSOP 合同)

私は昭和 53 年（1978 年）に横浜国立大学で開かれた第 12 回日本原生動物学会（大会長 齋藤 実 先生）に初めて参加し、「テトラヒメナのアクチン様蛋白質の性状」（沼田 治、渡辺 良雄）という演題で発表しました。それから 38 年間、日本原生動物学会（2013 年から日本原生生物学会）会員として、繊毛虫テトラヒメナを用いて、細胞質分裂、大核分裂、細胞運動、細胞内輸送などの研究を行ってきました。渡辺 良雄 先生から卒業研究のテーマとして頂いた「テトラヒメナのアクチンの研究」は 40 年以上たった今も、継続しています。最近、予想だにしない展開があり、テトラヒメナの面白さ、奥の深さに感激しております。

テトラヒメナの研究一筋の私は、平成 27 年に東京の国立感染症研究所で開かれた原生生物学会第 48 回大会で、会長に指名されました。本学会は 1967 年に故阿部 徹 先生と故猪木 正三 先生のお二人が中心になって、日本原生動物学会として発足しました。その趣意書には「広く原生生物の有する特殊性と一般性を明らかにすることを目的とし、原生生物に関心を持ち、あるいはこれを素材として扱われる方々の共同討議の場として」設立するとあります。

私は上記趣意書の理念を尊重して、原生生物学の研究と教育を推進するため、在任中に達成すべき目標として次の 4 点を挙げさせていただきます。まず、第一番目は原生生物に関心を持ち研究する人々の研究発表と情報交換の場である年大会の充実です。具体的には学会の枠を超えて原生生物に関連するシンポジウムを企画し、活発な異分野交流を図ります。第二番目は学会員のみならず原生生物学を研究する全ての人の研究成果発表の場である学会誌の充実です。J-STAGE による学会誌の電子ジャーナル化を契機として、オリジナル論文の充実と国内外の専門家による Review 執筆によって、存在感の大きな雑誌にします。第三番目は原生生物学を研究する若手研究者の援助です。若手研究者のパワーを学会活性化の原動力とするために若手研究者の支援をさらに充実します。そして、第四番目は海外の原生生物学研究者との研究交流の推進です。第 48 回大会で開催された日韓合同シンポジウムは大成功でした。これを機会に日韓の原生生物学者の交流を盛んにします。

私は 4 つの目標達成の target year として、学会創立 50 周年の 2017 年を考えています。これからの 2 年間で、これらの目標達成に向かって着実に地歩を固めていきたいと思います。会員の皆様には、何卒ご協力のほど宜しくお願い申し上げます。



***Tetrahymena pyriformis* の細胞分裂**
(左：走査電子顕微鏡像、中：抗 tubulin 抗体を用いた蛍光抗体像、右：DAPI 染色による DNA 染色像)

会長・各種委員・評議員名一覧（2015 年 11 月 9 日現在）

会 長：沼田 治
副 会 長：小林 富美恵

庶 務：細谷 浩史
庶務補佐：北出 理

会 計：永宗 喜三郎

編集委員：
廣野 雅文（編集長）、岩井 草介（副編集長）、岩本 政明（副編集長）、細谷 浩史、道羅 英夫（NL 担当）、西山 学即（NL・HP 担当）、西上 幸範（HP 担当）

監査委員：
楠岡 泰、菅井 俊郎

学会賞等選考委員：
岩本 政明、園部 誠司、月井 雄二

国際委員：
沼田 治、春本 晃江

ACP 国際委員：
沼田 治、細谷 浩史、八木田 健司

学会活性化委員：
児玉 有紀、島野 智之、杉浦 真由美、園部 誠司、野田 悟子、細谷 浩史、矢吹 彬憲

生物多様性会議委員：
島野 智之

評議員：
岩本 政明、遠藤 浩、北出 理、児玉 有紀、小林 富美恵、園部 誠司、月井 雄二、道羅 英夫、永宗 喜三郎、西山 学即、春本 晃江、廣野 雅文、福田 康弘、細谷 浩史、松岡 達臣、八木田 健司

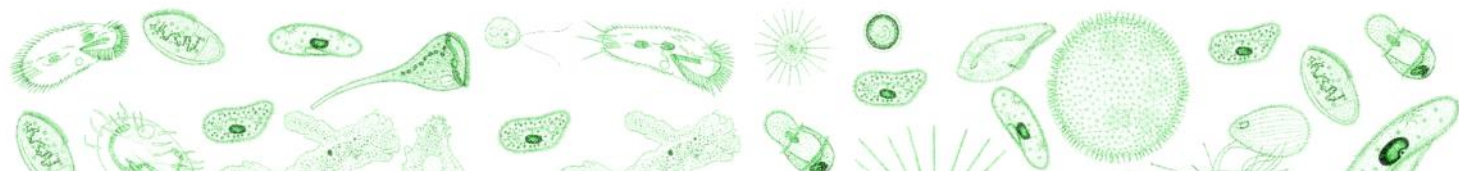
今年度より学会活性化委員会の委員長を仰せつかりました園部です。昨年まで委員長を務められました福田 先生ご苦労さまでした。多くのシンポジウムを開催され大きな成果を挙げられ、そのあとを引き継ぐということで重責ですが頑張ります。また、学会員の皆様のご協力も不可欠ですのでよろしくお願い致します。活性化委員は私の他、矢吹 彬憲（海洋研究開発機構・副委員長）、島野 智之（法政大学）、児玉 有紀（島根大学）、杉浦 真由美（奈良女子大学）、野田 悟子（山梨大学）、細谷 浩史（神奈川大学）各先生となっております。また、副会長の小林 先生にはサポーターとして参加していただくことになっております。委員会で様々なアイデアを出し、学会員の皆様にご提案していくつもりです。

はじめに、学会の活性化とはどういうことか私なりの考えを述べさせていただきます（とはいえ誰が考えても同じかと思いますが、まとめということで御笑覧ください）。活性化の目的として① 会員数の増加、② 研究者の増加、③ 共同研究の促進、④ 研究資金獲得の促進などが挙げられます。他学会でシンポジウムを行うことは原生生物を材料にしようとする研究者の増加、共同研究のきっかけにつながり、ひいては①や④にもつながるということで非常に有効な手段であると考えます。もちろん学会内においても共同研究の促進を図り、資金獲得につなげていくことは重要です。また、昨年度の大会で若手の会主催で「原生生物とベンチャービジネス」というタイトルでシンポジウムが行われましたが、こうした取り組み、すなわち原生生物と産業界とのつながりを構築するようなシンポジウムの開催は非常に挑戦的で意義深いもので、このようなシンポジウムを多く開催したいものです。活性化の活動の対象を何にあるいは誰にするのかについては研究者・学生（小中高大）・教員・一般の人など考えられます。将来を見据えると学生・教員・一般の人への展開が特に重要かと思いますが、これには宣伝活動が必要です。最も手早いのがインターネットを通じたもので、すなわちホームページ（HP）の充実を図ることが有効ではないでしょうか。月井 雄二 先生（法政大学）が長年構築してこられた原生生物情報サーバーのさらなる活用も重要だと考えます。その他、ポスターやパンフレットなどの作成配布も HP と連動してやれそうです。また、現在有志で行われている原生生物の実物を紹介するイベント（原生生物フェスティバル）や個人レベルの活動になりますが出前授業なども学会活性化につながると思います。以前行われたこともありましたが、学会の大会への高校生の参加を積極的に進めることも必要かと思っています。問題は原生生物を勉強した学生の就職口が少ないことですが、活性化の活動を通じて原生生物の重要性や面白さを広めていくことで増えていくことを期待しています。原生生物と一口に言っても様々な分野があり、それぞれの分野に特化した本の出版を学会として行うことも考えられます。もちろん、学会誌の充実も大きな力になると思います。編集委員会とも連携してやっていかなければなりません。

いろいろ理想論を並べましたが、次に具体的に何をするのか、について述べさせていただきます。まず、他学会での、あるいは共同でシンポジウムを開催します。活性化委員会だけでも各委員はさまざまな学会に所属しています。このつながりを利用してシンポジウムの開催を計画していきたいと思います。現在挙がっているところでは寄生虫学会、藻類学会、動物学会、生態学会、微生物生態学会、進化学会、分子生物学会、植物学会、細胞生物学会、生物物理学会などがあります。寄生虫学会とのコラボは前会長の故今井 壯一 先生の肝煎りもあり、また所属会員も何人かおられます。以前はもっと多くの共通の会員がおられたように伺っています。次回寄生虫学会は 3 月であり今年度は間に合いませんが次年度は是非にと考えています。藻類学会も 3 月ですね。これも次年度ということになります。活動開始が遅くなりこのようなことになってしまい、まことに申し訳ありません。これらの学会以外にも学会員の皆様からのご提案をいただきたいと思いますのでよろしくお願い致します。

さて、もう一つの活動目標は宣伝活動の充実です。先にも述べましたが、これには HP の充実、ポスター・パンフレットの作成などが含まれます。HP の充実は特に写真などの資料を充実させ授業などで利用できるものを増やすこと、学会で発表された研究成果の公開や研究室紹介なども編集委員会と協力してやっていきたいと考えています。時間はかかりそうです。また、学会員の皆様のご協力も仰がなければなりませんのでよろしくお願い致します。

最後になりましたが、来年は原生生物学会（原生動物学会）が誕生して 50 年の記念すべき年となります。活性化委員会としても何らかの記念イベントを行いたいと考えておりますが、まだ具体的なアイデアは出ていません。こちらも学会員の皆様のご提案をいただきたいと思いますのでよろしくお願い致します。



日 程：2016 年 1 月 9 日（土）10：00～11：40

会 場：国立科学博物館上野本館講堂

出 席：細谷 浩史（庶務），島野 智之（委員） *総会座長は島野が務めた。

【報告事項】

（報告 1）庶務（江口 克之）

2015 年度の活動

2015 年 1 月 9 日

第 32 回役員会を開催（東京大学総合研究博物館）。＜第 14 回総会で報告済＞

2015 年 1 月 10 日

第 14 回総会を開催（国立科学博物館上野本館講堂）。

第 14 回公開シンポジウムⅠ「国立自然史博物館の設立を望む」を開催（国立科学博物館上野本館講堂）。

2015 年 1 月 11 日

第 14 回公開シンポジウムⅡ「分類学と応用科学の接点-人間社会にとって必要不可欠な分類学」を開催（国立科学博物館上野本館講堂）。

2015 年 5 月 8 日

第 33 回役員会を開催（東京大学総合研究博物館）。

ABS 問題対策 WG，国立自然史博物館新設 WG を設置。

国立自然史博物館新設 WG 設置は，第 14 回総会において学術会議の代表から日本分類学会連合としての意見の取りまとめの依頼を受けたことに対応した措置である。

2015 年 10 月 3 日

生物科学学会連合第 12 回定例会議に村上 哲明 代表が参加。

文科省の「卓越研究員制度（案）」についての説明を受け，意見交換。

2015 年 12 月 21 日

独立行政法人大学評価・学位授与機構の研究開発部が実施した「学協会における，大学・大学院教育の分野別質保証の取り組み状況に関する調査」に対して，大塚 副代表が中心となり回答書を作成し，提出。

2016 年 1 月 8 日

第 34 回役員会を開催（東京大学総合研究博物館）。

大塚 副代表が中心となり，「分類学の一般社会への認知を高めるための各加盟団体の取り組みに関するアンケート」の素案を作成。

（報告 2）ニュースレター（富川 光）

2015 年 9 月にニュースレター 26 号を発行（手違いにより連合のホームページへの掲載は 2016 年 1 月）。

2015 年 1 月に開催された第 14 回シンポジウムのプログラム・要旨を中心に掲載。

（報告 3）ホームページ（佐々木 猛智）

ニュースレター，シンポジウム，国内重要コレクションなどの情報を掲載。

（報告 4）データベース（海老原 淳）

国内重要コレクション調査の結果（植物標本）を，連合ホームページ上で公開。

協力団体・個人の把握が不完全なため，加盟団体に協力いただきたい。

（報告 5）メーリングリスト（三中 信宏）

Taxa 会員数 1047 名（2015 年 12 月 10 日現在），1 年間に 21 名増。

（報告 6）

ABS 問題対策 WG 発足（WG 座長：村上 哲明）

（報告 7）

国立自然史博物館新設 WG（WG 座長：大塚 攻）

【審議事項】

（審議 1）役員の選出

役員会案・連合規約第 7，8，9 条に基づく

代表：大塚 攻（広島大学大学院生物圏科学研究科）

副代表：細矢 剛（国立科学博物館植物研究部）

庶務幹事：富川 光（広島大学大学院教育学研究科）

会計幹事：清 拓哉（国立科学博物館動物研究部）

監査員（2 期目：2016 - 2017）：上島 励（東京大学大学院理学系研究科）

監査員（2 期目：2015 - 2016）：篠原 明彦（国立科学博物館動物研究部）

（審議 2）2016 年度広報出版委員会委員の選出

委員長，Web：佐々木 猛智（継続）（東京大学総合研究博物館）

ニュースレター：江口 克之（首都大学東京大学院理工学研究科）

データベース：海老原 淳（継続）（国立科学博物館植物研究部）

出版、命名規約：川田 伸一郎（継続）（国立科学博物館動物研究部）
メーリングリスト：三中 信宏（継続）（農業環境技術研究所地球環境部）

（審議3）2015 年度決算

分担金支払状況

一般決算（清 拓哉）

会計監査報告（上島 励）

特別会計（川田 伸一郎）

会計監査報告（上島 励）

（審議4）2016 年度事業計画

2016 年第 15 回公開シンポジウムの開催（国立科学博物館上野本館講堂）。

2016 年 1 月 9 日 13:00 ~ 17:30 「東南アジアにおける生物多様性研究最前線 ~現在、そして未来~」 詳細は講演要旨集参照。

2017 年第 16 回公開シンポジウムの開催 2017 年 1 月 7 日（土）の午後を予定。

ニュースレターの発行 27 号を発行。連合加盟団体のトピックス、第 15 回シンポジウム要旨、加盟学会大会・シンポジウム案内等を予定。

加盟団体からも記事をお寄せください。

ホームページの更新 ニュースレター、シンポジウムの案内、意見書等の分類学に関する情報の掲載を継続的に行う。

データベース化の推進 国内の重要コレクション実態調査を進める。

ABS 問題対策 WG：ABS に関する国内外の情報収集と加盟団体への情報発信を行う。

国立自然史博物館新設 WG：加盟団体の意見を集約し、自然史研究の振興という日本分類学会連合の目的に合う、より良いマスタープランを描き、提案する。

（審議5）2016 年度予算

2016 年度の分担金 10,000 円

予算案（清 拓哉）承認

（審議6）その他

「国立自然史博物館設立に関する分類学会連合国立自然史博物館ワーキンググループからの意見書」に関する意見交換。適宜修正を加えたものを、日本分類学会連合の意見書として公表することについて承認された。

「国立自然史博物館の提言（案）」に関する意見交換。連合として提言（案）を支持することについて承認された。

国立自然史博物館新設に関して、日本分類学会連合は今後も支持し、積極的に関与していくことについて承認された。

（以上、日本分類学会連合の議事録に基づいています。）

2016 Ciliate Molecular Biology Conference 参加報告 小林 真弓（現・神戸大学大学院）

このたびは、若手の国際会議派遣費助成により、Ciliate Molecular Biology へ参加させて頂いたことに感謝いたします。この国際会議は、繊毛虫を材料とした分子生物学的な研究を行っている研究者が集まる会議で、2015 年 7 月 10 日から 16 日にかけてイタリアのカメリーノ大学で行われました。カメリーノはローマから北へ 200 km、バスでおおよそ 5 時間のところにあり、その道中には多くのヒマワリ畑が広がっていたのが印象的でした。また、学会の行われた旧市街地は城壁に囲まれ、石造りの建物が多く並び、中世ヨーロッパを彷彿とさせる町並みでした。学会では、DNA の再構築、ゲノム、形態、進化、生殖、共生など多岐にわたったテーマのもとで発表が行われました。口頭発表だけでなくポスター発表、また学部生による発表、ワークショップも行われました。

そのなかで、私は「Mating pheromone gamone 1 plays an important role in speciation of the ciliate *Blepharisma*」というタイトルでポスター発表を行いました。ガモン1はブレファリズマの接合の引き金となる物質で、基本的に種特異的に働くと考えられています。今回は、ガモン1に生じた変異の傾向と、その分子進化速度を他の遺伝子と比較した結果、ガモン1の種特異的な接合誘導能は、適応的な進化により生じた可能性が示唆され、種分化にも深く関わっている可能性があるということを報告しました。多くの人に発表を聞いていただき、そしてディスカッションを行うことができました。さらに私自身の研究とも関係のある興味深い発表を聞くことができました。多くの刺激を受け、大変有意義な学会となりました。

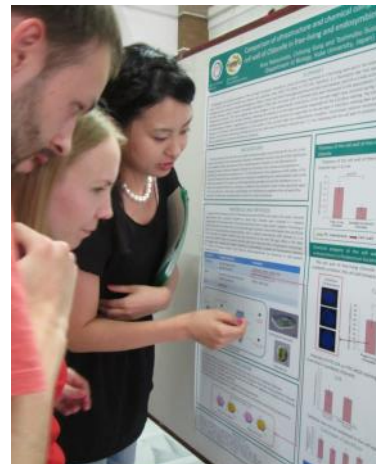
学会では研究発表以外のイベントにおいても楽しむことができました。大会4日目のエクスカージョンでは観光を行う機会も得られ、世界遺産であるサン・フランチェスコ教会のあるアッシジを観光しました。学会の行われたカメリーノやアッシジは、主要都市からは鉄道やバスを乗り継いで行かなければいけない山間の町だったため、このような機会に訪れることができ、幸運でした。会期が6日間と長く、朝早くから夜遅くまで行われたこともあり、疲れることもありましたが、総じて楽しむことのできた有意義な学会となりました。



大会最後の夕食 Social Dinnerにて

この度、国際学会への派遣費を助成していただき、深く感謝いたします。

私は 2015 年 9 月 5 ～ 10 日にスペインのセビリア大学で行われた「2015 VII ECOP Congress」に参加しました。「Comparison of ultrastructure and chemical composition of the cell wall of *Chlorella* in free-living and endosymbiotic conditions」という演題でポスターによる発表をしました。国際学会で発表するのは初めてで、学会の 1 ヶ月前から英語のポスターと発表原稿を作成し、練習を重ね、9 月 4 日にスペインへ旅立ちました。学会は南スペインのアンダルシア地方の主都、セビリアで催されました。セビリアは闘牛やフラメンコが盛んで、陽気で朗らか、街並みは色彩豊かで異国情緒たっぷり、思い描いていたスペインのイメージそのままでした。私の発表は 9 月 7 日で、それまで英語の発音の練習を続けました。そしてポスター発表の時間になり、始まってすぐに、男女二人組がポスターを見てくれました。覚えた原稿どおりに説明すると、二人は頷いてくれていて、拙い英語だが一応伝わっているようでした。しかし、問題が発生しました。向こうから投げかけられる質問が全く分からないのです。緊張も相まって文章を聞き取れず、焦れば焦るほど単語がばらばらに耳に飛び込んできて混乱してしまいました。私は英語をもっと勉強しておくべきだったと深く後悔しました。言語の壁に阻まれて自身の研究の紹介ができないのは、大変歯痒かったです。初めての国際学会は英語で苦戦しましたが、多くの方に発表を聞きにきてもらい、1 時間という持ち時間はあっという間に過ぎていきました。また、他の国の学生と話をすることができました。今回の経験をもとにして、自身の研究をより良いものへと発展させていきたいです。

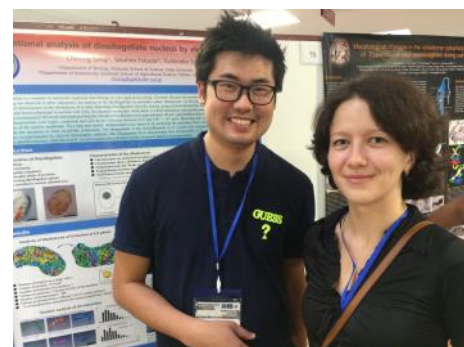


ポスター発表を行う筆者（右）

2015 VII ECOP Congress 参加報告

ソン チホン（現・生理学研究所）

2015 年 9 月 5 日から 10 日まで 6 日間スペインのセビリアで開催された VII ECOP Congress に参加してきました。初めてヨーロッパに行ったので、期待半分と不安半分の気持ちで飛行機に乗りました。カタールのドーハを経由してスペインのマドリードに着いて、それからまた電車と、日本から一日掛かって到着したセビリアの学会場はとても素敵なホテルだったので、やっと不安な気持ちは消えていました。到着した日の歓迎パーティーではヨーロッパ、オーストラリア、アジア、アメリカなど、世界のあちこちから集まった原生生物の研究者たちがお互いに久しぶりに会ったことで嬉しく挨拶し、話し合う風景でした。私も何人かの知り合いに久しぶりに会えて嬉しかったです。二日目はホテルでシンポジウムがありました。講義ではミドリゾウリムシの細胞内共生など、繊毛虫についての進化的解析の話がメインで、とても面白い話を聞かせていただきました。三日目からセビリア大学の Reina Mercedes Campus で本格的な学会が始まりました。口頭発表とポスター発表は二か所に分かれて行われました。分子系統学的な研究発表が多かったですが、形態学的、生理学的研究発表もたくさんあり、幅広く興味深い話をたくさん聞けました。私は今回のポスターでは渦鞭毛虫 *Oxyrrhis marina* の染色体の数を電子顕微鏡により解析した結果を発表しました。面白かったのは、隣のポスターでもロシアのあるグループにより渦鞭毛虫 *Prorocentrum minimum* の染色体の数を蛍光顕微鏡を用いて解析した結果が発表されていました。それでお互いにいいディスカッションもできて、私から共同研究を誘い、現在も共同研究を続けています。これも今回学会参加で得た一つの成果です。五日目の夜の懇親会ではスペインの素敵なコース料理をいただきました。懇親会の途中、だいたい雰囲気が熟してきた時、ヨーロッパの人々が一斉に団結して一つの声で何かを叫んだのは面白かったです。ヨーロッパ人の凄い団結力を感じました。最後の日には午前中ポスターの発表を聞いて、六日間の学会は終了しました。今回 VII ECOP Congress に参加して本当にいい勉強、いい体験ができました。原生生物学会から参加費用を助成して頂いたお陰で参加できましたので、原生生物学会の皆様



渦鞭毛虫の染色体数の解析と同じ研究目的でポスター発表をしたロシアの Mariia Berdieva さん（右）と筆者（左）

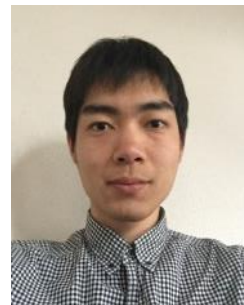


2015 年 9 月 9 日に開催された懇親会

若手の会会長就任のご挨拶

若手の会 会長 内之宮 光紀（九州大学）

原生生物学会若手の会の会長に就任しました、内之宮 光紀です。自己紹介の場をいただけるということで、自己紹介を兼ねて自身の研究と会長としての思いを書かせていただこうと思います。私の専門は数理生物学で、細胞性粘菌の協力行動の進化について数理モデルを使った研究をしています。この研究を通じて、生物の分子・細胞生物学的な性質と進化の理論を結び付けようと考えています。



これまでの多くの進化に関する理論は、行動や姿形などの進化的形質を扱う際には形質そのものを対象とし、どのような遺伝子やタンパク質が働いているかというメカニズムの部分については考えてきませんでした。メカニズムを考慮することで、ある形質が進化する場合にどのような分子的性質を持つように進化するかを議論することが可能になると期待できます。例えば、化学物質によって体の大きさが決まる生物では、見かけの大きさに違いがなくても、環境が異なれば化学物質の分泌能力や感受性に違いがあるかもしれません。理論と実験を組み合わせることで、理論によって分子的性質の進化の方向を予測して実験で確かめる、あるいは逆に実験で知られていることを理論的に合理的に説明することが可能になるでしょう。

次に、私の若手の会の会長としての思いです。原生生物学会の若手の会は非常に活発に活動しているのが特徴だと思います。ある研究分野の若手の活動というのは、学会だけにとどまらず、その分野の維持や発展にも非常に重要であると私は考えています。ベテランが研究をリードするのは当然ですが、人間はいつまでも研究が続けられるわけではありません。組織が存続するためには世代交代が必要であり、そのためには活力のある若手の存在が不可欠です。

また、昨今は異なる学術分野と融合した学際的な研究の重要性が高まっています。そのためには、学会やシンポジウムなどへの参加、留学などを通じて他の分野の研究者との交流することが最も効率的でしょうが、ベテランになるほど研究室の運営などに時間をとられて十分な時間をとることができないと思います。そこで、若手が他分野の研究者と積極的に交流し、新たな知識を吸収してそれをフィードバックすることで若手自身の成長と学会への貢献が同時にできると信じています。

原生生物学会、若手の会については科学の世界の更なる発展のため活動したいと考えていますので、皆様のご協力をよろしくお願い致します。

「ミクロ生物若手研究者集会・青少年サイエンスセミナー 2015 in 岩国」報告 末友 靖隆（ミクロ生物館）

若手の会では 2015 年 9 月 26 日（土）、27 日（日）の 2 日に渡り、岩国市ミクロ生物館と瀬戸内海を眼下にのぞむ山口県由宇青少年自然の家にて「ミクロ生物若手研究者集会 2015 in 岩国」を開催いたしました。本会は「顕微鏡下の微小な生物」を研究する若手研究者に広く参集いただき、研究分野や対象、学会の枠を超えた学術交流を行うことを目的としており、毎年 1 回、全国各地で開催しております。

メインイベントである 1 日目は 60 名にのぼる若手研究者にご参集いただき、8 題の口頭発表、7 題のポスター発表、京都大学大学院の河村 真理子さんによるクラゲの生理学実験をテーマにした体験型講座、立食形式の交流親睦会、座談形式の交流談話会など、盛りだくさんの講座が開催され、若手研究者間で有意義な研究交流や連携が生まれました。白熱した議論は空が白むまで続き、一部参加者はロビーのソファがベッド代わりになるほどでした。

また、2 日目は新たな試みとして「青少年サイエンスセミナー 2015 in 岩国」を開催いたしました。こちらは研究集会に参加した若手研究者が講師やアシスタントとなり、地域の青少年を対象にサイエンスショーや科学講座を実施するもので、これによって青少年の科学に対する興味や理解の増進、次代の若手研究者の育成への寄与はもちろんのこと、若手研究者の教育面におけるスキルアップが図れます。総勢 82 名の小・中・高校生の参加のもと、前日から参加している若手研究者とともに、中学生による発表を含むポスター発表に始まり、海産から淡水産まで総勢 20 種におよぶ微小生物の顕微鏡観察会、科学講座「手作りレーウエンフック顕微鏡でミクロの世界を見てみよう」（講師：早川 昌志さん、桐間 惇也さん）、「ミクロ生物の秘密に迫る」（講師：谷口 篤志さん）、サイエンスショー「ミクロ生物観察学習教室」（講師：園部 誠司 先生、小橋川 剛さん）、「ミズクラゲの体の構造と刺胞発射・摂餌行動観察実験」（講師：河村 真理子さん）



進路お悩み相談会「理系の仕事につくために学生時代にやるべきこと」（講師：内之宮 光紀さん）など幅広い内容が展開され、いずれも盛況のうちに幕を閉じることができました。参加したほぼ全ての青少年が満面の笑みで帰路についてくれたうえ、早くも「大人になったら原生生物の研究者になる！」と宣言してくれる小学生の参加者が現れるなど、主催者側としても開催して本当に良かったと思える2日間でした。

当初想定していた参加者数を大幅に上回るという嬉しい誤算もありましたが、梁瀬 前会長をはじめとする若手役員の皆様ならびに講師やアシスタントとして参加いただいた若手研究者の皆様による暖かいご支援、ご協力により、会期中はもちろんのこと、準備から片付けに至るまで全て滞りなく終えることができました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

「若手の会 2015 in 東京大会」 報告 梁瀬 隆二（兵庫県立大学）

11月6日に行われた第48回日本原生生物学会の若手の会では「原生生物とベンチャービジネス」と題したシンポジウムを開催いたしました。このシンポジウムは、昨今、様々な産業分野への応用が期待されている原生生物を用いたビジネスの実際や、ビジネスへの応用を目指す研究、さらには教育活動などへの応用について、実際に応用に取り組む研究者、企業の方からご講演をいただき、これからの原生生物研究の新たな可能性について考えることを目的として企画いたしました。

今回のシンポジウムには、神戸大学の長尾 賢杜さん、株式会社ユーグレナの丸川 祐佳さん、Life is small Projectの早川 昌志さんにお越しいただき、原生生物とベンチャービジネス、教育活動に関わるお話を聞かせていただきました。

神戸大学の長尾 賢杜さんには「原生動物による観賞魚用水槽の清掃法の開発」についてご講演をいただきました。長尾さんがジェックス株式会社と共同で行う原生動物を使って水槽をきれいにする方法の開発と商品化に向けた取り組みは非常にユニークで、これからの原生生物研究と産業分野との融合の新たな可能性を感じさせるものでした。

株式会社ユーグレナの丸川 祐佳さんには「ユーグレナを用いた 5F 事業」についてご講演をいただきました。原生生物を用いたビジネスにおいて、現在最も注目を集めている株式会社ユーグレナの 5F (Food, Fiber, Feed, Fertilizer, Fuel) 事業に関する取り組みは大変興味深く、会場の皆様からも多くの関心を集めていました。

Life is small Projectの早川 昌志さんには「微生物の出張型展示会と微生物のアート」についてご講演をいただきました。スマホ顕微鏡という画期的なツールを用いた微生物の出張展示会や教育活動に関する数々の取り組みについてご紹介いただき、さらには、早川さんがこれまでに培われてきた効果的な微生物展示のためのノウハウを共有していただきました。

また、シンポジウムに引き続き行われた「手作りスマホ顕微鏡による原生生物の観察会」では、参加者の皆様にスマホ顕微鏡を作成、原生生物の観察を行っていただき、教育活動におけるスマホ顕微鏡の有用性、利便性を実際に体験していただきました。

この度の若手の会シンポジウムにて素晴らしいご講演いただきました、長尾 賢杜さん、丸川 祐佳さん、早川 昌志さんには改めて厚く御礼申し上げます。また、若手の会の開催に向けてご協力をいただきました、大会長の八木田 健司 先生、実行委員の先生方、スタッフの皆様には心より感謝申し上げます。



若手の会シンポジウム「原生生物とベンチャービジネス」



若手の会ワークショップ「手作りスマホ顕微鏡による原生生物の観察会」

若手の会へご意見、ご要望をお寄せ下さい

日本原生生物学会若手の会では、若手研究者の皆様のご意見を必要としています。若手を中心にこんなことをしたら面白い、こんな企画をぜひ行いたいなどのご意見、ご要望をどしどしお寄せ下さい。また、若手の会役員も随時募集しています。興味のある方は内之宮 <uchinomiya@bio-math10.biology.kyushu-u.ac.jp> までご連絡下さい。

若手の会ホームページ

<https://sites.google.com/site/youngprotistologists/>

2016 年度 若手の会役員

会長	内之宮 光紀（九州大学）
副会長	池田 理佐（岡山大学）
会計	樋口 里樹（神戸大学）
編集長	早川 昌志（Life is small project）
HP 担当	梁瀬 隆二（兵庫県立大学）
役員	桐間 惇也（兵庫県立大学）
役員	小林 真弓（神戸大学）
役員	柴田 あいか（立命館大学）
役員	末友 靖隆（ミクロ生物館）
役員	松原 立真（筑波大学）

原生生物学関連の学会等開催情報

Moscow Forum “PROTIST - 2016”

期 日：2016 年 6 月 6 日（月）～ 10 日（金） 開催場所：Moscow, Russia

詳細情報：<http://onlinereg.ru/protist-2016>

17th International Conference on the Cell and Molecular Biology of Chlamydomonas

期 日：2016 年 6 月 26 日（日）～ 7 月 1 日（金） 開催場所：Kyoto, Japan

詳細情報：<http://www.molecule.lif.kyoto-u.ac.jp/chlamy2016/>

2016 Ciliate Molecular Biology Conference

期 日：2016 年 7 月 13 日（水）～ 17 日（日） 開催場所：Orlando, Florida

詳細情報：<http://www.genetics2016.org/communities/ciliate>

その他：今回は米国遺伝学会の関連集会（The Allied Genetics Conference, TAGC）として開催されます。

事務局からのお知らせ

庶務 細谷 浩史（神奈川大学），庶務補佐 北出 理（茨城大学）

（1）「日本学術会議・協力学術研究団体」登録申請について

これまで本学会では申請準備をしつつも登録に至っていなかった「日本学術会議・協力学術研究団体」について、改めて登録のための申請準備を進めることをメール評議員会で確認し決定いたしました。

当団体は、日本学術会議が各種研究団体との密接な協力関係を築くため、平成 17 年に従来の制度を改編し制定したものです。当団体として日本原生生物学会が登録されると、学術会議から広報・ニュースが配信され会議の共催・後援が可能になるなど、学術会議と協同して学術向上に貢献できる事が期待されます。

現在、主要な生物系学会の多くが登録済みで、文科系・工学系・医学系等の学術団体も多数登録されています。

（2）2017 年度の日本原生生物学会大会の開催地について

沼田会長からのご提案をいただき、2017 年度の日本原生生物学会大会を筑波大学で開催することをメール評議員会で決定いたしました。

（3）若手会員の原生生物学関連国際会議への派遣費助成について

今年度も、国際交流基金を原資（90 万円）とした若手会員の国際会議派遣費助成を実施いたします。今後募集の詳細を HP やメーリングリストでお知らせする予定です。ぜひご応募下さい。

編集委員会からのお知らせ

原生動物学雑誌 編集委員会

このニューズレターが発行される頃は、すでに新年度が始まり、新しい環境で研究、勉学に励んでいらっしゃる方も多いかと思います。当編集委員会も、昨年 11 月の大会から新体制となりました。陣容は、廣野 雅文（編集長）、岩井 草介（副編集長）、岩本 政明（副編集長）、細谷 浩史、道羅 英夫（NL 担当）、西山 学即（NL・HP 担当）、西上 幸範（HP 担当）です。これからも、会員の皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

また、原生動物学雑誌では掲載論文を募集しています。Regular Articles に加え、Short Communications, Reviews, Mini Reviews, Commentaries など、多様な発表の場を提供しています。詳しくは雑誌巻末の投稿規定をご覧ください。皆様からのご投稿をお待ちしております。

編集・刊行 日本原生生物学会 編集事務局

〒184-8584 東京都小金井市梶野町 3-7-2

法政大学 生命科学部 生命機能学科

日本原生生物学会 編集事務局（編集長：廣野 雅文）

Tel：042-387-6132 Fax：042-387-7002

E-mail：hirono@hosei.ac.jp

ニューズレター担当 道羅 英夫（静岡大学）
西山 学即（福島県立医科大学）

Protistology Newsletter 30 号は学会ホームページからもダウンロードできます。非会員の方への宣伝等にぜひご活用ください。

http://protistology.jp/journal/nl_letter/NL30.pdf